

ルーマン理論における二重の コンティンゲンツの位置づけ

沢谷 豊

1 問題設定

ニクラス・ルーマンの主著、『社会の社会』の翻訳も出版され、かれの社会理論がおおよそ見通せるようになった。かれの理論の目的は「全体社会の理論」にあり、そしてそれは大きく三部構成にわかれる（Luhmann, 1997: 11f. = 2009: vi-vii）。一つは社会システム論についての導入部分で、1984年の『社会システム理論』がこれにあたる。二つめは全体社会そのものを扱う部分で、1997年の『社会の社会』がこれにあたる。三つめは、全体社会の主要な機能的部分システムをとりあつかう部分である。

ルーマンの理論が難解であることには定評がある。その原因はいくつか考えられるが、かれがその理論を精緻化・修正していくさいに必ずしも以前の理論との違いを明示化しなかったということもあるのではなからうか。かれにとっては新たな成果を世に問うことの方が重要であつたろうし、時間がたりなかったことは容易に想像できよう。しかし、その結果として、理解する方にとってはやっかいな問題が残されたという感否めない。よく取りあげられる二重のコンティンゲンツ概念についてもそうしたことがいえるのではないだろうか⁽¹⁾。

二重のコンティンゲンツという概念は、かれの全体社会論に対する導入である『社会システム理論』においてきわめて重要な位置づけをあたえられている。この概念は『社会システム理論』の第三章で取り上げられているが、それ以前の二つの章が社会システムに固有の問題を取り扱っていない、つまり社会システムについての論述が開始されることになるその最初にこの概念が取りあげられているのである。もちろん、ルーマン自身はこの本がどこから読まれてもよいとしているので、形式的な章立てで判断することは危険かもしれない。しかし、この概念が社会システムの成立を説明するものとされていることからして、けっして看過することのできない重要性をもっているように思われる。

ルーマンがこの概念を取り上げるようになったのは、遅くとも1972年の『法社会学』である⁽²⁾。ただし、1976年の論文「一般化されたメディアとコンティンゲンツの問題」については微妙である⁽³⁾。というのは、この論文の註で、選択の帰属という問題とのかかわりで、さらなる精緻化については1972年の『法社会学』で展開されるであらうと述べていることからみても (Luhmann 1976: 528, Anm. 25), 72年以前に書かれた可能性が否定できないからである。

しかし、ここではまず1984年の『社会システム理論』をみてみよう。そこでのかれの定式化こそがさまざまな議論をひきおこした要因になっているからである⁽⁴⁾。

まずは、二重のコンティンゲンツと社会システムの成立との関係についてである。

(略) 社会システムは、当事者の双方がそれぞれ二重のコンティンゲンツを経験することによって、ならびに、こうした状況が当事者双方にとって規定できないがゆえに、そこで生ずるどんな活動に対しても構造形成的な意義があたえられるということによって、成立する (またそれ以外の方法では成立しないのである)。
(Luhmann 1984: 154=1993: 166)

つまり、二重のコンティンゲンツが社会システムの成立を説明するものとされているのである。しかし、こうしたシステムそのものの成立とならんで、二重のコンティンゲンツは社会システムの自触媒であるともされる。

(略) 二重のコンティンゲンツの問題は、自触媒的要因という特性を有している。つまり、この問題はみずから「使い果たされる」ことなしに、パースペクティヴに対するパースペクティヴによって規制されている新たな秩序レベルにおける諸構造の構築を可能にしている。そのさい、「自」触媒作用と云っているのは、二重のコンティンゲンツの問題それ自体が、形成される社会システムの構成要素だからである。
(Luhmann 1984: 170=1993: 185)

つまり、二重のコンティンゲンツの問題が社会システムの構造構築を可能にするが、この問題自体が、形成される社会システムの構成要素であるということである。

そのほかに、二重のコンティンゲンツ概念は行為の規定可能性とも関係している (Luhmann 1984: S.149=1993: 159)。しかし、本稿の目的は、社会システムの成立を説明する概念としての二重のコンティンゲンツと社会システムの自触媒概念としての二重のコンティンゲンツとのかかわりで、後者の概念はその後も主張され続けるが、前者はのちのルーマン理論では放棄されたのではないかということを示すことにあるので、この行為の規定可能性にはふれない。

2 「一般化されたメディアとコンティンゲンツの問題」

それでは具体的に二重のコンティンゲンツ概念を検討していこう。かれがこの概念を集中的に取りあげているのは、1972年の『法社会学』と、76年の論文「一般化されたメディアとコンティンゲンツの問題」、84年の『社会システム理論』、ならびにかれの没後2002年に出版された『システム理論入門』であると思われる。『システム理論入門』は1991年から92年にかけてルーマンがおこなった講義であるが、84年の『社会システム理論』の修正版ともみなすことができるものである（Luhmann 2002a: 7）。前述したように、76年の論文は『法社会学』以前に書かれた可能性もあるので、ここではこの76年の論文をまず最初に取り上げることにする。

まず、ルーマンは、『行為の総合理論に向けて』におけるパーソンズの二重のコンティンゲンツについてとりあげ、そのとらえ方ではこの概念がもっていた意味合いが失われるとして、次のようにこの概念をとらえ直すことになる。

（略）コンティンゲンツとは、存在するものが、存在しない可能性と他の可能性の存在とを内包する選択に依存しているということを意味する。ある事実は、他の可能性からの選択——そしてこの可能性は、選択がおこなわれたにもかかわらず、ある意味で可能性としてとどまり続ける——とみなされるとき、コンティンгентなのである。（Luhmann 1976: 509）

コンティンゲンツは後には簡単に必然性と不可能性の否定として定義されるようになるが、依存性ということを見れば、ここでも基本的には同じ事態を意味しているように思われる。また、このコンティンゲンツはすべての事柄にかかわっている。つまり、「客観的世界や、その生い立ちもふくめた具体的自我、意識的生活、決定や期待、他者の経験や選択をもふくめた人格」といったものは、すべてコンティンгентなのである。このようにコンティンゲンツはすべての現象にかかわるが、それは「他の可能性を否定したり、思い浮かべたりする主観の能力に依存している」、とされている（Luhmann 1976: 509）。

次に二重のコンティンゲンツであるが、かれは次のように述べている。

（略）二重のコンティンゲンツは単純な足し算の意味での二つのコンティンゲンツを意味するものでもない。またそれは単に、自我が他者に依存しそして他者も自我に依存するといった依存性を意味するものでもない。主観的な観点はあとになって、そしてこの相互依存の解釈としてはじめてあらわれるものである。二重化は構造の全体にかかわっている。すなわち、事実をその否定をふくむ選択であると考えたり、

またこの否定を否定して他の可能性を再構成したりする、一般化された潜在能力なのである。二重のコンティンゲンツは「潜在的な二重の否定」である。それは、否定の可能性が、相互に現実化されていないが包含された可能性として維持され、安定化されうる、ということの意味している。(Luhmann 1976: 509)

きわめて理解しづらい表現である。私なりに解釈してみるならば、現にあるものは数ある可能性のなかから多くの可能性を否定した[・]もの、つまり選択されたものであるということと、否定された多くの可能性をもう一度否定する、つまり選び直すことができるということの意味しているように思われる。したがって、この定義では主観はひとりでも二重のコンティンゲンツが成り立つことになる。これに対して主観同士が出会うならば、主観は他者についても同じ能力をもつ主観として経験することができる。このようにしてきわめて多くの可能性に富んだ意味的世界ができあがることになる。おそらくこうした現象が、後に二重のコンティンゲンツとよばれるものになる⁽⁵⁾。

76年のこの論文では、以後、主観が他の主観による選択を利用し選択するさいに生ずる選択性の組織化という問題を解決するものとして、コミュニケーション・メディアが取りあげられる。具体的には、権力や愛、真理などであるが、これについては割愛する。

また、高度のコンティンゲンツについて対処する方法として、社会システムとコミュニケーションをあげている点は興味深い (Luhmann 1976: 511)。つまり、この段階ではまだ社会システムとコミュニケーションを別のものととらえていた可能性があるということである。

もう一つルーマンにとって終生の課題であった全体社会とのかかわりで述べておきたいことは、その環境についてである。かれは今日の地球には全体社会はただ一つしかないとして、次のように述べている。

この一つのグローバルな全体社会の環境が他の人間社会から成りたつことはありえない。そしてその環境が地理的境界によって特徴づけられることもはや不可能である。それは、全体社会システムによって選択されることはなかったが、人類によってコンティンгентに利用可能な経験と行為の他の可能性から成りたっているのである。(中略) そうした可能性は、それにもかかわらず、言語や人間のもつ否定の能力が受け入れることのできる以上の可能性を構成するかぎり、存在しているのである。(Luhmann 1976: 526)

つまり、全体社会の環境にも経験と行為の可能性があるとされているのである。いわば選択されなかった社会的行為やそうした行為を秩序づける社会的構造といった可能性が、現にある全体社会の環境とされているのである。そうした意味では、全体社会の環境に

も社会的現象が存在していることになる。

3 『法社会学』

次に検討したいのは、『法社会学』である。二重のコンティンゲンツが主として取り上げられているのは第2章の第1節であるが、それは次のように始められている。

人間は意味的に構成された世界に生きているのであり、人間にとってのその意義は、人間の生理機構によって一義的に規定されるのではない。それゆえ世界は、人間に体験と行為のきわめて多数の可能性を示すのであり、それに対して、現実意識的に知覚し、情報を処理し、行為する能力はきわめて限られている。すなわち、その時々眼前にあり、それゆえ明白に与えられている体験内容のなかには、複雑かつ不確定的なまろもろの可能性の示唆が含まれている。ここで、複雑性 (Komplexität) というのは、現実化されうる以上の可能性がつねに存在するということを指す。また不確定性 (Kontingenz) というのは、次に来る体験の可能性として指示されたことが予期されたとは別様に生起しうるということを指す。(Luhmann 1972: 31=1977: 37-38)

ここではコンティンゲンツに「不確定性」の訳が当てられている。ここでのコンティンゲンツは、システムの構造である予期とのかかわりで、予期が外れる可能性を意味している。そして、予期が外れた場合に対する備えが必要なのである、と。

二重のコンティンゲンツが出てくるのは他我との連関である。

(略) 複雑かつ不確定的でありながら、しかも予期可能的に構造化されたこのような世界のなかには、他の意味と並んで他の人間が存在する。他の人間は、自己と同様に、独自の体験と行為との源泉にほかならぬものとして、すなわち「他我」(alter ego) として、自我の視野に入ってくる。それは外界に不安の要素をもたらすが、これによって始めて、およそ完全な意味での複雑性と不確定性とが形成されることになる。(中略) 私は他人の視座をとり、それを私自身の視座の代りに利用する機会を獲得する。それは、他人の眼で物を見て、そこから何かを学びとり、それによって、たいした時間の消費なしに自己の体験の地平を拡大する機会である。このことによって、知覚の直接的選択性の飛躍的な発展が得られるのである。／それに対して支払わなければならない代償は、危険の増大にある。すなわち、知覚の場の単純な不確定性が、社会的な世界における二重の不確定性へと高められることにある。(Luhmann 1972: 32=1977: 38-39)

ここで「知覚の場の単純な不確定性が、社会的な世界における二重の不確定性へと高められることにある」とされているように、ここでの「二重」は社会的な関係とのかかわりで発生する二重性であろう。つまり、最低限二人の人間の存在を必要とするという意味合いでの二重性である。

こうした二重のコンティンゲンツに対して、ルーマンは予期の予期、ないしは予期の予期の予期といった複雑な構造が必要であるとしている。しかしながら、そうしたさまざまな構造的可能性をつねに念頭におくことは日常生活では不可能である。そこで単純化が必要になるのだが、それは「単純化の結果事実もしくは事実の予期が誤って解釈された場合にも、やはり構造化の機能を果たしえなければならない」(Luhmann 1972: 36=1977: 42) ののだという。このことは心理システムにもパーソナリティ・システムにもあてはまるが、『法社会学』ではそうした構造化の機能を果たすものとして、全体社会の法を解明しようとしている。もちろん、全体社会の構造は、法だけにかぎられるものではない。法のような規範的構造ばかりでなく、科学のような認知的構造もあれば、コミュニケーション・メディアや全体社会の分化図式の制度化なども社会構造であるとされている(Luhmann 1972: 134=1977: 151)。いずれにせよ、社会システムの構造は世界の複雑性を縮減したものであるとするルーマンの考えが顕著に表れている。

ここでも、全体社会とその環境とのかかわりを確認しておこう。

そこでは、社会システムは、有意味に関連しあうもろもろの行為の構造化されたシステムとして、具体的な人間を要素とするのではなく、これを排除するのである。人間は、一つの心理的システム(パーソナリティ)によって制御される一個の生物体として存在するものであって、構造によってこの心理的・生物体的システムに許容されるもろもろの可能性は、全体社会という社会システムに許容される可能性と同一ではない。別の言い方をすれば、もろもろの行為を結びつけて全体社会システムとする意味連関は、ある人間の現実の行為および可能な行為の——有意味に制御されるものではあるが生物体に基礎づけられている——連関とは別ものである。これら二つのシステムを構成するものが同一の諸行為であるからといってシステム自体が同一だという結論は出てこないものであり、それぞれのシステムはもろもろの可能性のなかからそれぞれ異なった選択を行なうことによって自己の統一性を得るのである。したがって、人間と社会とは、たがいにとって環境である。人間と社会とは、その時々、たがいにとって過度に複雑であり、不確定的なものである。そして両者は、それにもかかわらず存立しうるように構造化されている。社会の構造と境界は、複雑性を縮減するとともに、生物体的・心理的に可能なるものの不確定性を吸収する。それは、とりわけ、人間そのものに対する境界である。(Luhmann 1972: 133f.=1977: 151)

全体社会の環境としてはさまざまなものがあるだろうが、とりわけ重要なのがパーソナリティ・システムによって制御される人間ということになる。社会システムと人間はたがいに環境であるとするテーゼは初期の頃から繰り返されているものであり、周知のことさらに属すといえよう。ここで注意を喚起しておきたいことは、行為の位置づけである。社会システムと心理システムを構成する要素は双方ともに行為であるにとらえられているのである。ここでの言い方をすると、諸行為を結びつけて社会システムとする意味連関は、諸行為を結びつけてパーソナリティ・システムとする意味連関とは異なるということである。例えば『公式組織の機能とその派生的問題』では、「システムは具体的な行為のレベルにおいてではなく、行動期待のレベルで構築されるのである。具体的な行為は複数のシステムに同時に属することができる。」(Luhmann 1964: 59=1992: 80)と述べられているように、システムは行動期待という構造のレベルではじめて確認しうるものとされていたのである。ここでの「意味連関」も同様に構造的レベルを指していると思われるのである。また、1970年代半ばからさかんに言及されるようになる「自己準拠的に閉じたシステム」や「自己組織性」といったシステムのとらえ方においても、システムをその環境から区別できるのは構造のレベルにおいてであり、要素のレベルとは考えられていないのである。

のちには社会システムと心理システムの区別は要素レベルで確認できるとされるようになる。すなわち社会システムの究極的要素はコミュニケーションであるとされる。心理システムの要素については思考や注意力、志向性といったようにゆれがみられるが、社会システムの要素についてはコミュニケーションに一本化されていく。その移行期にあたるのが次に検討する『社会システム理論』なのである。

4 『社会システム理論』

先に述べたように、『社会システム理論』で二重のコンティンゲンツについて集中的に取り扱われているのは第三章である。

本書では、コンティンゲンツは「必然性と不可能性の排除」として規定し直される。つまり、「不可能でも必然でもないものがコンティンгентである」とされるのである(Luhmann 1984: 152=1993: 163)。

ルーマンは、パーソンズの二重のコンティンゲンツ問題を継承し、それをとらえ直すとする。そして、意味規定能力をもつ「自我」や「他我」との関係で、二重のコンティンゲンツを次のようにとらえる。

意味を体験している心理システムがあるならば、二重のコンティンゲンツの問題はつねに潜在的には存在している。この問題はすべての体験に随伴するものではある

が、自由な選択が帰属させられる他の人格ないし社会システムに出会うまでは、意識化されることはない。他の人格や社会システムに出会うと、この問題は相互の行動の調整問題として顕在化することになる。そうした顕在化を引き起こすのは、具体的な現実の心理システムないし社会システムであるか、あるいはそうしたシステムがあとに残した跡形（たとえば書かれたもの）である。しかしながら二重のコンティンゲンツが焦眉の問題となるには、これらのシステムが出会うという単なる事実のみでは不十分である。二重のコンティンゲンツが現実の問題化されるようになるのは（そしてそれとともに、社会システムが構成されるようになるのは）、これらのシステムが特有の仕方で体験され取り扱われるばあいに、つまり限りなく開かれた、また基本的に外部からの介入を寄せつけない意味規定の可能性として体験され取り扱われるばあいに限られるのである。このために、自我（Ego）や他我（Alter）、ないしはもう一人の自我（alter Ego）といった特別の用語が用いられるのである。したがって、自我や他我といった概念を用いるさいには、その対象は心理システムでも社会システムでもかまわないし、また、これらのシステムが一定の意味処理に同意してもしなくてもかまわない。（Luhmann 1984: 151f.=1993: 162-163）

ここではルーマン的な二重のコンティンゲンツ概念が色濃くでている。つまり、「二重」というのは、自我と他我という二つのシステム（主体）がかかわっているがゆえに「二重」といつているのではない。意味を体験している自我がいれば、対象が他我ではなくてたとえば自然現象であっても二重のコンティンゲンツは成り立つものとされているのである。『法社会学』における註でも、「予期された体験の現実化は、私自身にのみ依存するのではなく、世界がこの可能性を私のために用意し、私がそこに到達するまでそれを変更しないでいてくれることにも依存しているのである。OLDS, a. a. O.は、すでに、これを二重の不確定性と名づけ、社会的な不確定性をそれにふくめて考えている」（Luhmann 1972: 32, Anm.12=1977: 45註4）と述べられているように、対象となるものが何であってもそれはコンティンгентであるから、意味的な体験をする自我がいれば、それでコンティンゲンツは二重であるという言い方をすることができるのである。この場合は「予期された体験の現実化」が「私」に依存するとともに「世界」にも依存し、また「私」の選択も「世界」の選択も他の可能性を有している、つまりコンティンгентであるといった程度の意味であろう。もちろん、この二重のコンティンゲンツが急務の問題として意識されるようになるのは、対象が他我の場合というわけである。

第二節では、二重のコンティンゲンツを、心理システムと社会システムの双方をふくむ、ブラック・ボックスということばでとらえ直そうとする。

二重のコンティンゲンツの公理で前提されている基礎にあるのは、たがいに不透明で計算できない、意味を使用する高度に複雑なシステムである。これは心理システムでも社会システムでもかまわない。われわれは差しあたりこの違いを無視しなければならないので、「ブラック・ボックス」ということばを用いることにしよう。そうすると二重のコンティンゲンツの基本状況を簡単に表すことができる。すなわち、二つのブラック・ボックスが、いかなる偶然にもとづいてであれ、たがいに関係をもたなければならなくなるという状況がそれである。(Luhmann 1984: 156=1993: 168)

このたがいに他を見通しえない自己準拠的に作動するシステムが関係し合うことにより、創発的な秩序、つまり社会システムが発生してくるとするのである。曰く。

(略) それら (=ブラック・ボックス) は、環境-内-システムとしての他者についてインプットないしアウトプットとして観察できるものに集中し合い、そのつど自己準拠的にそれぞれみずからの観察の観点で学習するのである。それらが観察するものに対してみずからの行為で影響をあたえようとすることができるし、そのフィード・バックから再び学習することもできる。このようにして創発的な秩序が成立することがあるが、この秩序はそれを可能としたシステムの複雑性によって条件づけられてはいるが、しかしこの複雑性が計算可能であるということにも制御可能であるということにも依存してはいない。われわれは、この創発的秩序を社会システムとよぶことにしよう。(Luhmann 1984: 157=1993: 169-170)

ここで確認しておきたいことは、社会システムは秩序レベルで、したがってまた構造レベルで問題にされているということである。つまり、要素レベルは問題にされていないということである。すでに述べたように、ルーマンの社会システム論にあって、オートポイエーシス概念が登場する以前は、社会システムを要素レベルで確認することはできないものとされていた。ここにはそうした考え方が色濃く残っているように思われるのである。

いずれにせよ、個別のブラック・ボックスの作動様式は知られていない以上、ブラック・ボックスが関係することによって発生する社会システムは、そうした作動様式には還元されることのない創発的な秩序であるということになる。しかし、ここでは社会システムという創発的秩序と二重のコンティンゲンツとの関係がはっきりと説明されていないように思われる⁽⁶⁾。

さらにルーマンは、次節では、「社会秩序はいかにして可能か?」という問題の立て方の意義を説明する。これに対して二つのとらえ方があるという。第一のとらえ方は、不

都合な行動を回避したり抑圧したりすることによって秩序が達成されるとするものである。そのとらえ方の典型を示すのがホップズでありパーソンズであるとされる。第二のとらえ方は二重のコンティンゲンツの問題を徹底化する方向である。そのために、社会秩序の成立という現象がきわめて確率的に低いものであるということがまず示される。

各人がコンティンгентに——すなわち別な行為も可能であるという条件のもとで——行為するならば、また各人はこのことが自分自身についても相手についてもあてはまることを知っており、そしてそれを考慮に入れるならば、まずは、みずからの行為がそもそも相手の行為に接点を見いだす（そしてそれによって意味をあたえる）可能性はきわめて低いものになる。というのは、自己の行為を確定するためには他者がその行為を確定することが前提となるであろうし、そしてその逆も成り立つだろうからである。(Luhmann 1984: 165=1993: 179-180)

しかしながら、そのすぐあとで、社会秩序の発生する可能性が低いということから、社会秩序の発生が通常のことであることも説明されるとしてしまうのである。

みずからの行動の不確実さにくわえて、相手の行動選択も不確実でしかもこちらの行動に左右されるとするならば、まさにこのことにもとづいて、このことを考慮に入れてみずからの行動を規定する可能性が発生する。したがって、生ずる可能性の低さが二重化されることにより可能となるもの、そしてみずからの行動規定を容易にするもの、それこそが社会システムの創発なのである。(Luhmann 1984: 166=1993: 180)

生ずる可能性の低さが二重化されることによって、どのような偶然からによってであれ、社会システムは一気に創発するというこの主張を、どのように解釈すればよいのであろうか。同じくここでも説得力のある説明はみられないように思われる。

続く節では、「二重のコンティンゲンツの問題の発生からその問題の解決を始動させる事態にいかんしていたのか」ということが論じられる。そこで重要になるのが「我が欲することを汝が為すなら、我は汝の欲することを為す」という自己準拠にもとづく循環であるという。これを逆に言うならば「汝が我に規定されざるときは、我も汝に規定されることなし」という未規定的な状況ということになる。いずれにせよこうした循環的状況は、それにかかわっているシステムのいずれにも還元できないものである。そして、こうした状況においてなされる行動は、「二重のコンティンゲンツから帰結される未規定性をまさに縮減」するものでもあるとされる。つまり、社会システムが成立するというのである。しかし、このような未規定的な循環が社会システムの成立にとって本

当に必要なものであろうか。ルーマン自身も「『純粹な』二重のコンティンゲンツ、つまり社会的に完全に未規定的な状況は、確かにわれわれの社会的現実のなかにはけっしてあらわれることはない」(Luhmann 1984: 168=1993: 183)としているのであり、疑問が残らざるをえない。

次節では、自触媒としての二重のコンティンゲンツが取りあげられる。まずは二重のコンティンゲンツとの関係で、社会システムの形成、ないしは社会システムの構造形成について言及される。そして、この社会システムが再び二重のコンティンゲンツという問題をつくりだすものとされる。これが自触媒であるといわれるゆえんである。

社会システムの構造は自他の行為を規定可能なものとするわけであるが、その構造にもとづいて他者の行動を動機づけようとするならば、それは他者がその行動を変更するきっかけとなる。これは自我が他我の行為を予測しようとしていることが他我に知られている場合も同様である。このようにして二重のコンティンゲンツの問題が再現することになる。こうした状態は、自我にとっても他我にとっても「規定不能で、不安定で、耐えがたい」ものなのであり、この点では自我と他我の経験は一致する。だからこそ双方で規定に対する関心が高まり、そして「システム構築の可能性が、構造を発生させるためにほとんどあらゆる偶然を利用することができるような待機状態になる」(Luhmann 1984: 172=1993: 188)とされるのである。この説明でも、やはり私には二重のコンティンゲンツの問題によって社会システムの形成を説明するには論拠が不十分であるように思われる。

その後、時間とシステム境界、信頼について述べられ、第九節では自己準拠（自己言及）の問題が取りあげられる⁽⁷⁾。ここでは二重のコンティンゲンツの問題には二つの変種があるとされる。一つは、「非規定性以外には言及することのない短絡した」二重のコンティンゲンツの問題であり、これは行為レベルでの問題である。もう一つは、「条件づけと制限された選択肢を計算に入れた、システムのそれまでの状況に依存する、構造化された」二重のコンティンゲンツの問題である(Luhmann 1984: 184=1993: 205)。そして前者の問題は、どのような偶然によっても解決されうるものとされ、後者の二重のコンティンゲンツの問題へと移行していく。そして、前者から後者への移行は容易であるが、後者から前者への移行は困難であるとされる。

最後に、第三章ではないが、『社会システム理論』で全体社会の環境がどのようなものととらえられているかをみてみよう。第十章では、「全体社会の環境には社会的なものとは存在しない」とされている(Luhmann 1984: 555=1995: 743)。可能性とはいえ社会的なものを全体社会の環境として認めていた初期の立場からの変化は明瞭であろう。ちなみに、この『社会システム理論』では、社会システムの要素について、その力点が変化しているように思われる。第三章などでは、社会システムの要素としては行為に力点が置かれ、続く第四章ではコミュニケーションに力点は移行するが、それでもなおかつ

行為も必要であるとされる。そして後半になっていくと行為の意義がさらに減少していくように思われる。つまり、全体社会はコミュニケーション以外のものを含まないシステムであるとされるようになるのである（Luhmann 1984: 557=1995: 746）。社会システムの要素をコミュニケーションであるとするこのような立場から出てくるのが、全体社会の環境には社会的なもの、つまりコミュニケーションは存在しないという命題なのではなかろうか。

5 『システム論入門』

『システム論入門』の第七章で、ルーマンはいくつかの社会学的概念の再解釈を試みるとしている。その最初に取り上げられているのが二重のコンティンゲンツの概念である。

まず、「二重のコンティンゲンツという奇妙な表現の背後には、古くからの問題、すなわち、いかにして社会秩序は可能かという問題の再定式化が隠されている」（Luhmann 2002a: 315=2007: 392）としている。そして、「絶えず複雑化し、つねにより前提に富んだ規制をつくりあげる能力をもった社会秩序が、進化的ドリフトのなかでどのようにして成立するのか」（Luhmann 2002a: 317=2007: 394）という問題に対する答えを見つけることが必要だという。この指摘は以前のかれの立場が変化していることを示しているように思われる。つまり、社会システムそのものの成立を問題にしてはおらず、構造変動へと関心が移行しているのである。

また、二重のコンティンゲンツと社会システムの成立は時間的前後の問題ではないとされる。ホップズのいう自然状態を歴史的に確認することができないとしたあとで、ルーマンは二重のコンティンゲンツについて次のように述べている。

二重のコンティンゲンツにかかわる疑問もけっして前後関係モデルの問題ではありません。社会秩序が次々に問題視されるようになると、すなわちすべての前提が解消されるならば、最後にはつねに二重のコンティンゲンツをどう扱うのかという疑問があらわれるのではないか、といったかたちで二重のコンティンゲンツにかかわる疑問はたてられるべきなのです。すなわち、いかなる社会状況についても、それが完全に行為を不可能にしてしまう（中略）この循環にいかにして陥らないのか、という観点から問うことができるのです。（Luhmann 2002a: 321=2007: 399）

ルーマンによれば、「いかにして社会秩序は可能か」といった問いは、近代社会への移行状況と緊密な関係にある。つまり、社会システムが成立していて、それが崩壊に瀕するような状況になると「社会秩序はいかにして可能か」ということが問題としてあらわれるようになるのであり、そうした状況を定式化するひとつの方法が二重のコンティン

ゲンツであると考えられているのである。したがって、二重のコンティンゲンツは、「機能分析のための準拠問題の発明」(Luhmann 2002a: 322=2007: 400) としてとらえ直されているように思われる。

本書は講義であるとはいえ、『社会システム理論』における二重のコンティンゲンツのとらえ方がかなり修正されている。つまり、この1992年段階で、社会システムの成立を説明するものとしての二重のコンティンゲンツは放棄されたように思われるのである。これに対し、社会システムの構造変動をもたらす要因——おそらくは数ある要因の一つ——としての二重のコンティンゲンツは社会システムの自触媒としてその後も維持されている。

6 結びにかえて

ルーマンの社会理論は、かれのいうシステム論のパラダイム転換によって大きく変化した。その最初の成果が『社会システム理論』であろう。しかし、この著作にはそれ以前のかれの立場も色濃く残されているように思われる。そうした立場をさらに修正したのが、作動構成主義ということになるのであろう。

いずれにせよ、社会システムの究極的な構成要素が行為ではなくコミュニケーションだとされるようになるわけであるが、それとコミュニケーションというできごとは単発で発生することではなく、つねにネットワークのなかでしか発生しえないとするテーゼを受け入れるならば、コミュニケーションがあるならば社会システム（全体社会）があるということになる⁽⁸⁾。行為の規定可能性や二重のコンティンゲンツといったことは、コミュニケーションなくしては、つまり社会システムなくしては、そもそも問題にさえなりえないであろう。したがって、コミュニケーションのみを社会システムの要素とする立場からは、二重のコンティンゲンツが社会システムの成立を説明することなどありえないように思われる。最後にこの点に関して、『社会の教育システム』からの引用をあげておこう。

諸個人はたがいに相手を、未だ規定されていないものとして、コンティンгентに行為するものとして知覚することができる。しかし、そのことだけから「二重のコンティンゲンツ」が生ずるわけではなく、「一重のコンティンゲンツ」状態での膨大な量の個人的計算があらわれるにすぎない。社会システムが形成されてはじめて、個人も「私があれこれの振る舞いを選び、相手がそれを自身にかかわるコンティンгентな選択だと解釈できたとしたら（解釈するに違いない、ではない!）、相手は何をするだろうか」といわば私的に考えることができるようになる。というのは、そのような考えが可能となるためには、用いることのできるオプションの数々

が社会秩序によってすでに大幅に縮減されていることを、前提とするからである。
(Luhmann 2002b: 33f.=2004: 29-30)

先に示したように、初期のルーマンは、現にある社会システムの構造を、可能性のある数多くのシステム構造からの選択ととらえていた。すなわち、全体社会の構造とはそうした多くの可能性という複雑性を縮減したものととらえていたのである。この複雑性との関係で、コンティンゲンツないしは二重のコンティンゲンツ概念は重要な意義をもつ。社会システムの究極的要素を行為ととらえるかぎり、構造レベルでしか社会システムとパーソナリティ・システムとを区別することはできなかった。それゆえ、自我や他我、あるいはブラック・ボックスというたがいに見通すことのできないシステム構造によっては説明することのできない、創発的な現象として社会システムをとらえざるをえなかったのではなかろうか。

社会システムの成立を説明するものとされた二重のコンティンゲンツの問題は、社会秩序を回復させるためのさまざまな可能性を発見するための問題、つまり機能分析のための準拠問題として発明されたものと解釈すべきものではないだろうか。

註

- (1) 近年だけでもさまざまな研究者がこの概念を取り上げている。例えば、長岡克行『ルーマン／社会理論の革命』の第八章や、佐藤俊樹『意味とシステム』の第二章、福井康太『法理論のルーマン』の第一章、春日淳一『ルーマン理論に魅せられて』の第二章などをあげることができるだろう。ドイツ語の文献をフォローすることはできなかったが、Daniel Barbenの指摘はわたしの立場と近いものがある。また、Andreas Göbelの研究にも新しい発見があった。本来ならばひとつひとつ取りあげて検討すべきところであろう。しかし、それらの見解は本稿におけるわたしの立場とは異なるように思われるという指摘にとどめたい。
- (2) ルーマンの著書の索引にしたがっているので、索引のない論文集や、各雑誌に載せられた論文については未確認である。
- (3) 個人的な話になるが、私が大学院生のときだったと記憶しているが、富永健一先生から、この論文が載せられているパーソンズの記念論文集の原稿依頼は1968年あたりにあったということを知ったことがある。いずれにせよ執筆しているときとそれが出版されるときでは時間的な隔りがあるのであり、必要以上にこだわることはないのかもしれない。
- (4) ルーマンの文章の翻訳については、すでに日本語訳のあるものについてはそれを参照したが、一部修正したところもある。
- (5) こうした現象を示すために、ルーマンは、「二重に二重のコンティンゲンツ」という表現を用いたことがあるとGöbelは指摘している(2000: 91, Anm.125)。
- (6) 同様の指摘としては、Barben(1996, S.70ff.)がある。
- (7) 本稿ではこの自己準拠ないし自己言及の問題については取りあげることはできないが、Selbstreferenzという同一の表現が、異なる概念をあらわすことに使われているように思わ

れる。これについては稿を改めて論じたい。

- (8) ただし、認識とのかかわりがあり、じつはそれほど単純に断定することはできない。作動にもとづく認識、自己言及と外部言及の区別、観察者といった説明すべき問題が残されているからである。

文献

- Barben, D., 1996, *Theorietechnik und Politik bei Niklas Luhmann*. Opladen (Westdeutscher Verlag).
- Göbel, A., 2000, *Theoriegenese als Problemgenese. Eine problemgeschichtliche Rekonstruktion der soziologischen Systemtheorie Niklas Luhmanns*. Konstanz (UVK Universitätsverlag Konstanz).
- 福井康太, 2002, 『法理論のルーマン』勁草書房.
- 春日淳一, 2008, 『ルーマン理論に魅せられて』文真堂.
- Luhmann, N., 1964, *Funktionen und Folgen formaler Organisation*. Berlin (Duncker & Humblot) 沢谷豊他訳『公式組織の機能とその派生的問題 (上巻)』新泉社, 1992.
- 1972, *Rechtssoziologie*. 2 Bde. Reinbek (Rowohlt). 村上淳一, 六本佳平訳『法社会学』岩波書店, 1977.
- 1976, *Generalized Media and the Problem of Contingency*, in: Jan J. Loubser/Rainer C. Baum/Andrew Effrat/Victor M. Lidz (Hrsg.), *Explorations in General Theory in Social Science: Essays in Honor of Talcott Parsons*. New York, Bd. II, S. 507-532.
- 1984, *Soziale Systeme: Grundriß einer allgemeinen Theorie*. Frankfurt a. M. (Suhrkamp). 佐藤勉監訳『社会システム理論 (上)(下)』恒星社厚生閣, 1993・95.
- 1997, *Die Gesellschaft der Gesellschaft*. Frankfurt a. M. (Suhrkamp). 馬場靖雄他訳『社会の社会』法政大学出版局, 2009.
- 2002a, *Einführung in die Systemtheorie*. Heidelberg (Carl-Auer-System Verlag). 土方透監訳『システム理論入門』新泉社, 2007.
- 2002b, *Das Erziehungssystem der Gesellschaft*. Frankfurt a. M. (Suhrkamp). 村上淳一訳『社会の教育システム』東京大学出版会, 2004.
- 長岡克行, 2006, 『ルーマン／社会理論の革命』勁草書房.
- 佐藤俊樹, 2008, 『意味とシステム』勁草書房.